

國學院大學学術情報リポジトリ

円仁の足跡を訪ねて(IX)-山西省-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 溝口, 優樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001429

円仁の足跡を訪ねて (IX)

— 山西省 —

溝口優樹

論文要旨

『入唐求法巡礼行記』^{にいつちうぐほうじゆんれいこうき}には、九世紀前半の唐において円仁^{えんにん}がおこなった求法・巡礼の様子が記されている。國學院大學入唐求法巡礼行記研究会は、これまで円仁の足跡を明らかにする調査研究をおこなってきたが、その一環として二〇一三年十二月には、円仁が開成五年（八四〇）八月七日から十三日にかけて訪れた洪洞県から蒲津関にいたるルート（現在の山西省^{さんせいしやう}）の踏査を実施した。さまざまな成果があったが、襄陵鎮では『巡礼

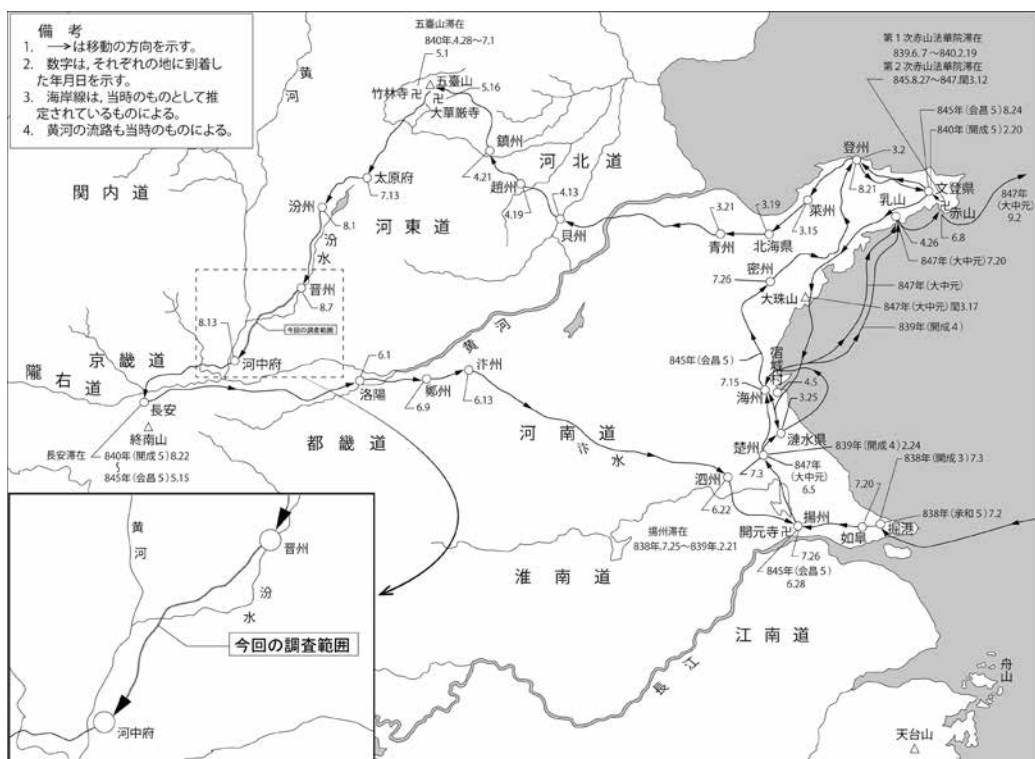
行記』にもみえる「晋橋」^{しんきやう}の地名および同名の橋を確認した。また、京安村では『巡礼行記』に記された「故関店」にあたる「故関」の地点を突きとめた。さらに、現在の汾城鎮は円仁が訪れた太平県^{たいへいけん}にあたるが、城壁が良好に残存しており、円仁が通った「南郭門」の遺構を確かめることができた点などを特筆することができるとある。一方で汾河の渡河点や黄河流域のルートは河道の変遷が想定されるため、復元が困難であった。

はじめに

『入唐求法巡礼行記』には、九世紀前半の唐において円仁がおこなった求法・巡礼の様子が記されている。國學院大學入唐求法巡礼行記研究会は、これまで円仁の足跡を踏査する旅を積み重ねてきた。二〇一一年度までの踏査記録は『栃木史学』の誌面上で公表されている。⁽¹⁾ 本研究会の活動は、日本学術振興会の平成二十四年度～二十六年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本古代の仏教受容と東アジアの仏教交流」（研究代表者・佐藤長門）にもとづくもので、二〇一三年度で二年目を迎えた。前年度には韓国調査を実施したが、

二〇一三年度はこれまでに実施してきた円仁の足跡を訪ねる旅を再開した。前回の中国調査は、山西省太原から屈項村（『入唐求法巡礼行記』巻三、開成五年（八四〇）八月六日条⁽²⁾）に該当するとみられる洪洞県の上紀落村まで実施している。⁽³⁾ 今回の調査はそれに続いて、洪洞県（八月七日条）から蒲津関（八月十三日条）に該当するであろう永濟市の蒲津渡までを対象とした（図1）。

参加者は、研究代表者の佐藤長門（國學院大學教授）（肩書きは当時のもの。敬称略。以下同じ）、連携研究者の酒寄雅志（國學院大學栃木短期大学教授）・金子修一（國學院大學教授）・田中史生（関東学院大学教授）・山崎雅稔（國學院大學助教）、研究協力者の王海燕（浙江大學副教授）・李侑珍（崇実大学校講師）・河野保博（洛陽外國語学院外籍教師）・筆者（日本学術振興会特別研究員）に中村和樹（國學院大學大学院生）・三輪仁美（同上）・柳田甫（同上）・高橋紘（同上）・森知之（同上）と日中韓三カ国から集まり、学際的・国際的な構成となっている。



【図1】円仁の行程と今回の調査範囲

河野保博氏作成「円仁在唐行程図」（鈴木靖民編『円仁とその時代』所収、高志書院、2009年）をもとに一部改変・加筆

第一日目 二〇一三年十二月二十二日（日）

日本から出発するメンバーは、八時に羽田空港国際線ターミナルに集合し、NH一二五九便に搭乗した。一〇時二四分に離陸した飛行機は、現地時間の一二時二四分に上海虹橋空港に到着した。ここで酒寄・王・李各氏と合流し、バスで虹橋空港の国内線ターミナルへ移動した。国内線の搭乗まで時間があつたのでカフェで休憩したが、一度着いた席から移動するよう店員から指示された。何が始まるのかと思えば、そこで店員が食事を始めたのであつた。

啞然としながらの休憩を終えた我々は、一四時三〇分にMU二四〇五便に搭乗し、太原空港に到着したのは一九時六分のことであつた。太原空港では、飛行機から降りた瞬間から石炭のような臭いがした。荷物を受け取ってから、河野氏と添乗員の薛東風氏と合流し、マイクロバスでホテルへ向かう。太原の最低気温はマイナス一〇度、最高気温は三度とのことである。車内では中国の大気汚染の話題で持ちきりだった。太原の大気汚染は非常に深刻で、路上駐車車の自動車が真っ黒になるほどであつた。宿泊先の愉園大酒店に到着したのは二〇時三〇分のことである。もう営業時間は過ぎているとのことであつたが、ホテル二階の食堂で夕食を摂った。その後、二二時から翌日の打ち合わせをおこない、就寝した。

第二日目 二〇一三年十二月二十三日（月）

七時に起床し、八時にホテルを出発した。途中で昼食を摂るなどして、最初の目的地である王屯村に到着したのは一四時頃であつた。一昨年の調査でも、『巡礼行記』に記された王桐村に比定される王屯村を訪ねたが、その際には村人から「石炭工場を建設するため、来年の三月で村がなくなる」との説明をうけていた。王屯村は、昨夜宿泊したホテルから、今年度の調査開始地点である洪洞県までの道中に位置しているということもあり、その後の様子を確かめるために訪れることになったのである。我々一行は、東王屯でバスを停

めて村を散策したが、一昨年に聞いた村人の話とは異なり、村は壊されていなかった。閑散としつつも人が生活しており、犬が徘徊している点などは一昨年と変わりなかった。我々はあつけにとられつつ、「省級重点文物保護単位」となっている天斉廟を見学した後、東王屯を後にした。

一五時三九分、嚴耕望^①が陰地関に比定している高壁村に到着した。円仁は、「県を過ぎ、汾河にそって南行すること二十里」で陰地関に至ったと記している（八月四日条）。しかしこの高壁村は、靈石県からの距離が遠すぎる点や、山の陰に「陰地」にならない点などから、何らかの関が設けられていた可能性はあるものの、陰地関に比定することは困難であるとの結論で一致した。陰地関には前回調査をおこなった、汾河沿岸の夏門鎮の方が相応しいのではないかとの意見が優勢であった。

高壁村を後にすると、時間がなかったため、前回調査の最終地点である上紀落村に立ち寄ることを諦めて洪洞県を目指した。しかし、途中で渋滞に巻き込まれたため、臨汾のホテルへ向かうことになった。洪洞県の付近、石止村の辺りまで来ると、何やら人々が集まっていたバスが進めなかった。どうしたのか運転手が訪ねると、木製の棺があり、納棺が済むまで通行できないとのことであった。しかし、三元を払うと通行できるとのことであったので、それを支払い先へ進んだ。薛氏によると、事実か否かは不明であるが、このような名目で通行料を取るとは山西省では珍しくないとのことである。結局、臨汾市の紅樓大酒店に到着したのは一九時半頃であった。その後、ホテル二階のレストランで夕食を摂り、翌日の予定を確認した後、ミーティングをおこない就寝した。

第三日目 二〇一三年十二月二十四日（火）

七時にモーニングコールがあったが、その直前に街を行き交う自動車のクラクションの音で目が覚めた。朝食は七時からということだったので起床した人々が食堂に集まったものの、食べるものは殆どなく、わずかに前菜とケーキがあるのみであった。順次食べ物が運ばれ、出そろったのは七時三〇分頃であった。薛氏によると、従業員に苦情を言っても解決はしないが、言わないことには改善の余地がないということである。

八時三五分にはホテルを出発し、洪洞県人民政府へと向かった。現地を訪れる前に地方政府で情報や資料を収集することは、巡礼行記研究会が調査を積み重ねるなかで確立した方法の一つである。円仁は前日に宿泊した屈項村大曆寺から「南に行くこと廿里」で洪洞県に到り、ここで断中したと記している（八月七日条）。王・河野両氏は県城の位置や資料収集のため地方志の当局に向かい、「洪洞県治図」（『山西省洪洞県志』（一）（成文出版社、一九六八年）に収録されているものと同内容）などのコピーを入手した。県政府を離れ、一〇時二五分には洪洞県南側の西端に到着した。ここは洪洞県から臨汾へと向かう出口に当たり、関があったと想定される場所である。なお、洪洞県は隋代に現在の場所に移っており、城壁は明代に築かれたものという。

洪洞県を後にした我々一行は、洪洞県から臨汾市へ至るルートを確認するべく、韓村へと入った。旧道ということで、韓村を通る国道（G一〇八）の西側の道を進むことになった。鉄道をくぐり、北へバスを進める。さらにバスを降りて農道のような道を北へと進むが、途中で行き止まりになっていることを確認した。つまり現在、この道は洪洞県までは繋がっていないということである。再びバスに乗り、来た道を南に戻り、韓村を通過した。一二時三三分頃、前日に宿泊したホテルに到着し、二階のレストランで昼食を摂った。

午後は臨汾市内の調査である。洪洞県を発った円仁は、「南に行くこと六十里」で晋州城内に到り、市西の普通院に宿したという（八月七日条）。この晋州城が、現在の臨汾市堯都区の辺りに当たる。一三時四〇分頃、荷物をバスに積んで出発した。王氏は別行動で臨汾市の役所へと向かっていた。我々一行は、一四時に大雲寺と同じ敷地にある臨汾博物館に到着した。ただそこは旧館で、主な展示品は新館へ移ったらしい。説明板によると、大雲寺は俗称鉄佛寺といい、唐の貞観六年（六三二）に創建された。また、大雲寺は臨汾城の西南隅に位置するという。塔のなかには鉄佛寺という俗称の由来となった、鉄製の仏像が安置されていた。この塔は康熙三十四年（一六九五）の平陽大地震で壊れ、同五十四年（一七一五）に重建されたものであるという。ここで、単独で臨汾市役所に向かった王氏と連絡をとると、役所は昼休み中ということであった。業務開始は一五時からということで、時間がないので市役所での聞き込みは諦めて、我々一行と合流した。

大雲寺を後にし、古城街において「西関」の地名を確認して、汾河を渡る。旧道に入り、金殿村や新風村（鎮）を通過して、襄陵鎮の中心に向かった。円仁は晋州城の西門を出て、「西南へ行くこと卅里」で晋橋店に到り、断中したと記している（八月八日条）。

襄陵鎮では、『巡礼行記』にもみえる「晋橋」の地名を発見した。ここを小川が流れており、そこに架かる橋も「晋橋」と呼ばれているという。橋には三つのアーチがあり、真ん中のアーチには龍頭と龍尾があらわれていた。我々は河川敷に下りて、「晋橋」（龍頭側）の見学をおこなった（写真1）。小川は薄く氷が張っており、数名はそれを足場にして対岸へ渡った。対岸へ渡った人は橋を見学して次々と戻ってきたが、高橋氏の次に佐藤氏が通ると氷が割れて足が小川にはまってしまった。「晋橋」の両橋詰めにはそれぞれ商店があり、我々は二つのグループに分かれ、お店のなかを通してもらい、龍尾側をみにいった。商店の人は、かつて僧侶がこの橋を渡り西安に向かったことを知っていた。その僧侶が円仁を指しているのか不明であるが、太原方面から長安に向かうと、この橋を渡ることになる。おそらく円仁も、その一人であったのだろう。

襄陵鎮を出発した我々は、一六時三〇分、京安村に入った。円仁は晋橋店から「南に行くこと廿五里」で故関店に到った。そして河を過ぎて景雲普通院に入り、宿泊している。その河の北は晋州襄陵県南界で、河南絳州太平県北界であるという（八月八日条）。

『説史方輿紀要』巻四一には「太平関」についての記述があり、旧名を「故関鎮」とであると記す。また『元和郡県志』巻一二・河東道一には、後魏の太武の時に設置されたと記す。さらに『襄陵県志』巻一九・古蹟条には、太平関が襄陵県の南、京安鎮にあり、後魏の太平真君期に立てられたとある。これらを要するに、『巡礼行記』に記される故関店に比定できるのが、我々一行が訪れた京安村だということである。

小野勝年によれば、円仁が渡河したのは襄陵県と太平県（汾城県）の県界をなしている古関併であり、この河を境として唐代にはすでに故関（京安鎮）と新関（古城鎮）が相對していたのではないかという⁽⁵⁾。我々は、その河に架かる橋の袂でバスを降りた。河を挟んで南は京安村、北は北街村である。村人によると、この橋は「五眼橋」と呼ばれて何百年もの歴史があるというが、『中国文物地図集』



【写真1】「晋橋」（龍頭側）

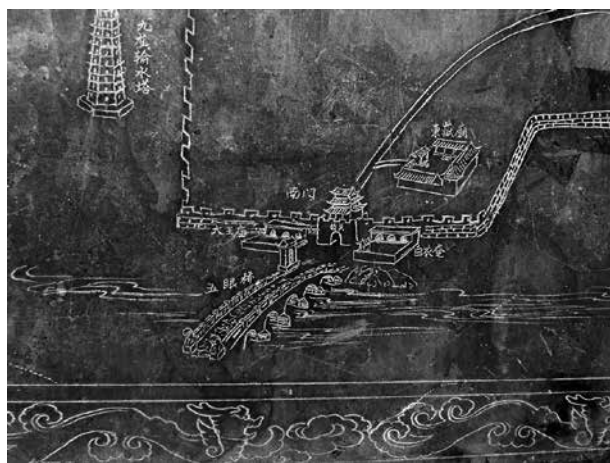
に載っている「同済橋」という名称は知らないという。また、その下を流れる河（汾河の支流）の名前は、誰も知らなかった。京安村を歩くと、鐘樓を発見した。そこに掲げられた二〇〇四年の重修碑をみると、この鐘樓が明代の天順三年（一四五九）に創建されたことや、「五眼橋」が「通惠橋」の俗称であることがわかった。また「京安村原古建示意图」をみると、京安村の南門に「故関」と表示されていた（写真2）。これによって、ここが円仁の通過した故関鎮であることが確認できた。

次いで五眼橋を渡り、南岸の北街村へ入った。「襄汾県古城中心衛生院」という病院の門をくぐると、そのなかに崩落して骨組みと初層のみとなった磚塔の跡が遺されていた。さらに、病院の下の方の崖の補強の石積み、礎石が用いられていたのを確認することができた。あるいはかつて、この辺りには寺院があったのかもしれない。しかし、円仁が宿泊した景雲普通院との関係は不明である。

一七時四五分、バスに乘車して出発した。古い道を通って古城鎮からG二二二に抜けるようとしたが、車止めがあって進めず迂回することになった。古城鎮を出て、宿泊先の候馬へと向かう。その途中で汾城鎮を通過したが、ここの調査は翌日おこなうことになっている。北柴から高速道路に上り、候馬まで向かった。宿泊先の華翔大酒店に到着したのは、一九時五七分であった。二〇時三〇分にホテル一階のレストランで食事を摂った後、ミーティングをおこない、就寝した。なお、クリスマスイブだったからか、ホテルの外はお祭り騒ぎのようであった。

第四日目 二〇一三年十二月二十五日（水）

八時四五分に荷物をバスに積み込み、襄汾県汾城鎮を目指した。『巡礼行記』によると、景雲普通院を出発した円仁は「南に行くこ



【写真2】「京安村原古建示意图」にみえる「故関」

と廿五里」で太平県に到り、そこで断中している（八月九日条）。太平県とは後の汾城県であり、現在の汾城県に当たる。高速道路を利用して汾城県に到着したのは、一〇時一〇分頃であった。東関村から汾城鎮の中心部へ入り、人民政府の辺りでバスを降りて鼓楼を目指す。鼓楼の創建年代は不詳だが、康熙三十四年（一六九五）に地震で壊れ、同四十五年に重建、道光二十二年（一八四二）に重修されたという。また、鼓楼の西側には学前塔をみる事ができた。その付近には文廟の屋根もみえる。

さて、円仁は太平県の次に長秋駅へ向かって未申（南西）の方角に進むのであるが、その際に太平県城の「南廓門」から出ている。したがって我々一行も、太平県城の南関を探すため、南関村へと向かった。汾城鎮を南へ進んでいくと、「屏姑射」の文字が掲げられた埴積みの門を発見した。門から外側へ石敷の道路が延びていた。また門の両側には、南北方向に版築の施された壁を確認することができた。ここから西側へいくと、「全国重点文物保护单位」である洪濟橋がある。これ

は金の大定二十三年（一一八四）に創建されたものである。洪濟橋を通り過ぎると、すぐ西側に太平県城の跡が視界に入った。我々は夢中で駆け寄り、貪るかのように見学し、あるいは写真を撮った。門は埴積みのアーチになっており、外側に向かってやはり石敷の道路が延びていた（写真3）。

このとき、筆者らのグループは酒寄氏ら数名とはぐれていたのであるが、廟に在るとの情報を得てそこへ向かった。その廟とは元代の老君廟であり、故城から坂を上がって北西方向へいったところの民家のなかにあった。家主のご厚意で、見学させていただくことができた。廟のなかには鐘があり、「當大元至順元年」の銘を確認することができた。

我々は老君廟を後にして洪濟橋を南西へ進むと、先ほど確認した門よりもさらに外側に城壁の跡を確認した（写真4）。やはり版築が施された壁には、埴積みのアーチが設けられている。こちらは、太平県古城の南郭門（外側の門）に該当するのであろう。円仁はここから、太平県を出発したのである。その後、洪濟橋の所までバスに迎えにきても



【写真3】 太平県城の南門

らい、南関村を後にした。

一四時三分、昼食を終えた我々は、バスで北関村へ向かった。G二二三から西へ村のなかに入り、さらに徒歩で西へと向かった。地元の人の話によると、北関は壊したということであったが、城壁の残存状況は非常に良好で、北関村の入り口から県城北西の隅まで城壁が遺っているのを確認することができた（写真5）。一四時五十六分、

北関村を後にした我々は再び南関村に入って北へ向かい、南郭門を外側から確認したうえで、泉掌村を指摘した。円仁は太平県

城の南廓門から出て未申の方向へ向かい、

五十里で長秋駅に到り、宗家店に宿したという（八月九日条）。『直隸絳州府志』巻二は泉掌が古長秋鎮にあたるとし、『大清一統志』巻一一八もそれを引用している。泉掌村へ向かうにあたっては、旧道が通っていた可能性のある良陌村、焦村、北王村、義西毛村、李村、北蘇村を経由した。ただ、北蘇村では車止めがあったので引き返し、興平村から迂回しようとしたが、またもや車止めに阻まれ、やむなくG二二三を通過して新絳県管内へと入った。

一六時四五分、泉掌鎮に入り、まもなく泉掌村に到着した。バスを降りて、『中国文物地図集』に大修故城跡の表示がある辺りへと向かうと、東西にのびる土の盛り上がりが確認できた（写真6）。村人によれば、かつて東西に延びる城壁があったが、すでに壊したとのことであった。しかし、土の盛り上がりを見ても、明確な版築の痕跡が確認できないので、メンバーからは疑問の声もあった。



【写真4】太平県城の南郭門



【写真5】太平県城北側の城壁

一七時二〇分、泉掌村を後にして、河津市の天都大酒店に到着したのは一八時三二分であった。二〇時から、ホテル二階のレストランで夕食をとり、ミーティングをおこなった後、就寝となった。

第五日目 二〇一三年十二月二十六日（木）

八時四五分、バスに荷物を積み込んで出発する。午前中は河津の調査である。円仁は長秋駅から「西に行くこと三十里」で稷山県に到り、さらに「県を去ること十五里」の地で斎をおこない、さらに「西に行くこと六十五里」で龍門県に到り、招提院に宿している（八月十日条）。この龍門県が現在の河津市である。王氏は先に河津市政府で情報収集をおこなっているのので、我々は河津市博物館に向かった。石刻が多くあったが、調査に直接役立ちそうなものは少ない。共産党が建てた「河津県城迁移碑」には、河津県の変遷が要領よくまとめられていた。

博物館の方によると、県治は少しづつ東へ移動しており、蓮花池が唐代の東関にあたるという。河津市博物館を後にし、一〇時一三分、蓮花池に到着した。蓮花池はかつて県治にあった池とされる。地方志の担当者によると、それは唐代にも存在していたという。県の東側に池が設けられている事例は、一般的にみられるとのことであった。現在の蓮花池は干上がっており、水はほとんどなかった。北側には九龍公園が位置している。かつては、九龍公園の南側に城があったという。

蓮花池を後にし、新華書店河津店で地図を探したものの、置いていなかった。一〇時四九分頃、西関村の辺りに到着した。共産党の碑文によると、県治は宋代に米家関村に移ったとあるので、米家関村へと向かい位置を確認した。その後、旧道を経由して汾河へと向かう。円仁は龍門県から「西南に行くこと十六里」で「新橋渡」に到り、ここで汾河を西岸から東岸へ渡ったという（八月十一日条）。



【写真6】泉掌村の土の盛り上がり

一一時二一分、太陽村（陽村）に入り、南西方向へと進んで、太陽村の碑楼を確認した。碑楼の表裏には、ともに清代の石碑が安置されていた。次いで連伯村を経由し、一二時一〇分、汾河の北岸に到着した。汾河は概略東北から西南に流れるが、その流路は幾度も蛇行している。この地で汾河は東から西へと流れており、正面の南岸には東西に延びる台地が広がっていた。少なくとも、現在のこの地点は『巡礼行記』に記された汾河の渡河点の様子とは一致しない。河道の変化もあり、円仁が汾河を渡った地点を特定することは非常に困難である。汾河を後にして、一旦河津市内に戻り、昼食を摂った。

一三時二三分に再び出発し、汾河南岸の台地上に上がってゆく。一四時一三分、西梁村に入った。村内には三基の石碑があったが、いずれも清代のものであった。村の北側にある壁に登ろうとすると犬がいて進めなかったが、飼い主に頼んで犬を抑えてもらい、登らせてもらった。壁の上からは東西に汾河が流れ、西に黄河、北（正面）には「登竜門」で知られる竜門峽を望むことができた。西梁村を後にした我々は、台地を北へ下って南岸から汾河を確認し、さらに秦村へと向かった。円仁は汾河の東岸に着いてから「正南に行く」と卅五里」で宝鼎県管内の秦村に到り、村院に宿している（八月十一日条）。我々は馬家莊、南梁村、南衛村、東丁王村を通過して一五時三四分、秦村に入った。西梁から秦村へと続く道は、現在ない。秦村でバスを降りて調査をおこなった。地形を確認すると、険しい谷となっていて渡河することは難しく、ここを円仁が通過したとは考えがたい。村人に聞き込みをおこなうと、秦村という名称は変わらないものの、今の秦村の西隣にあたる、谷に隣接する位置にもとの秦村があり、それが東隣へ移ったという。もとの秦村があったとされる辺りには、二〇〇四年に作成された「秦黄粮庫碑志」が掲げられていた。立地を考慮すると、円仁が記している秦村はもつと東側に位置していたのかもしれない。なお村人によると、西側の古い建物を動かしたら病気になるとの迷信があり、盗掘に来た人が病気になるたことである。

秦村を後にして、王帝丁村、王胡村、西師村、西卓子村を通過し、一六時三四分に栄河鎮に到着した。円仁は秦村を発してから「南に行くこと廿五里」で宝鼎県に到り、「天王邑」において断中している（八月十二日条）。「天王邑」は「天王院」に改めるべきであろうか。宝鼎県は北宋の大中祥符四年（一〇一一）に栄河県と改められており、その後身が現在の栄河鎮ということになる。ただし、県治は民国十年（一九二一）に遷されている。栄河鎮に到着した我々は『中国文物地図集』に載る関岳廟を探したが、村人によるともう

ないとのことであった。さらに調査をおこなっていると、「栄河村水電管理中心」のなかに娘娘廟があった。娘娘廟とは道教の女神を祭る廟である。

その後の聞き込みで、偶然話しかけた老女が別の廟の鍵をもっていることが判明し、案内してもらった。現在は「栄河村老年人協会」となっているが、かつては「憑村老三社」だったようである。石碑が数点あり、そのうちの一つは村人によると、北魏時代の造像碑だというが、詳細は不明である。また村人から「かつての宝鼎県は今の栄河鎮よりも黄河寄りにあり、かつての県治は今の宝鼎県の東側にある宝井にあった」という話を聞いた。

我々は栄河鎮を後にし、宝井を目指した。宝井村はかつての宝鼎県の東の部分にあたる。わずかであるが、城壁を確認することができた。地元の人によると、かつての宝鼎県は黄河の下に沈んでしまったという。『巡礼行記』には宝鼎県城に関する記述がなく、円仁が城内に入ったかどうかは不明である。県城へ入った場合はそのことを記すことが多いので、宝鼎県城には入らなかった可能性もある。ただし、仮に円仁が宝鼎県内に入ったのであれば、ここを通ったのかもしれない。城壁を見学した後、村内の建物に石碑が埋め込まれているのに気づいた。碑文には、ここに東城門があったこと、かつて洪水があったことが記されていた。

一八時一二分、バスに乗り込み、宝井村を後にしてホテルに向かった。永済の海納温泉国際大酒店に到着したのは、一九時三三分のことである。二〇時より三階レストランで食事を摂ったが、その部屋の名前は「五台山」であった。薛氏が『巡礼行記』に関係の深い名前をもつこの部屋を選んできたのである。ここでは汾酒をいただいた。汾河を渡って飲む汾酒も味わい深い。その後、ミーティングをおこない、就寝した。

第六日目 二〇一三年十二月二十七日（金）

八時四五分、バスに乗車する。比較的暖かく、大気の様子も比較的良好である。午前中は永済市の調査を予定している。前日の調査地点から少しとんでいるが、博物館を見学する時間等を考慮してのことである。最初の目的地である永済市博物館に到着したのは、九

時頃であった。博物館には屋外に石刻が多数置かれていたが、大半が明代から民国時代にかけてのものであった。展示室はない（室内の収蔵品は非公開）とのことで、直接この調査に役立ちそうな情報は得られなかった。

永済市博物館を後にして、我々は蒲津渡遺址博物館に向かった。道中の車窓からは、東西に走る中条山脈がみえた。九時四三分、博物館に到着した。一人五〇元だったが、六十歳以上は無料とのこと。ただし今回は団体料金が適用され、全員で五〇〇元であった。蒲津渡遺址博物館は、発掘調査がおこなわれた蒲津渡遺址を博物館としたものである。つまり、この博物館のある場所が黄河の渡河点ということになる。黄河の渡河をめぐって、円仁は次のように記している。

十三日、早く発つ。南に行くこと四十里、辛駅に到り、店頭にて断中す。齋の後、南に行くこと三十五里、河中節度府に到る。黄河は城の西辺より南に向かひて流る。黄河は河中府より已北、南に向かひて流れ、河中府の南に到りすなはち東に向かひて流る。北より入り、舜西門を出づ。側に蒲津関あり。関に到りて勘入することを得たり。便ち黄河を渡る。船を浮かべて橋を造り、闊さは二百歩許り。黄河は西に流る。橋を造ること兩処。南流すること遠からず、兩派合す。都て七重の門を過ぐ。西に向かひて行くこと五里、河西県に到りて八柱寺に宿す。県を去ること百歩来の地なり。

この記述によると、河中府の側に蒲津関があり、円仁はそこに設けられた広さ二百歩ほどの船橋を利用して黄河を渡ったことになる。さて博物館に入ると、蒲津渡遺址から出土した鉄人四体、鉄牛四体をはじめとして、鉄柱墩、鉄山などが野外に展示されていた（写真7）。これらは、唐代に遡る遺物とされるものである。これらの遺物は、もともと浮き船を繋ぐ竹紐を支えていたが、開元年間に鉄鎖に変わり、後に再び竹紐に戻ったとされる。博物館内には明代の蒲津関の跡が遺っていた。一時七分に博物館を後にし、黄河東岸の蒲津渡口に向かった。遠く対岸に陝西省大荔県の街をかすかにみるこ



【写真7】鉄人・鉄牛

ができた。

一時二三分、蒲津渡口を後にして明代の鼓楼を見学した。この鼓楼は明代の嘉靖元年（一五二二）に建てられたものである。トレンチが設けられ、レンガの上に板状の石が重なっており、階段状になっているのを確認することができた。さらに蒲津古城東門を見学した。現在遺っている東門は明の洪武四年（一三七二）に建てられたものであり、民国時代まで使用されていたとされる。東側の城壁も、残存状況は良好であった。ちなみに蒲津城は西門と北門も遺っており、北門は現在も使用されているとのことである。

昼食を終えた我々は、円仁の行程の前日からの続きを調査するため、永濟から北上した。円仁は宝鼎県から「南に行くこと四十里」で臨晋県粉店に到り、宋家に宿している（八月十二日条）。この「臨晋県粉店」に相応しい地点、ないしは宝鼎店からそこへいたる道の探索である。我々はまず、角杯村を訪れた。宝鼎県から「南に行くこと四十里」とする『巡礼行記』の記述を勘案すると、角杯村は東に寄りすぎているかもしれない。円

仁の通った道は、もっと西寄りの黄河沿岸の可能性が考えられる。次の候補地として、黄河の東岸に位置する楊范村を訪れた。現在、楊范村には南北の道は通っていない。楊范村が所在している台地は、黄河によってかなり侵食されている（写真8）ようで、実際に崖崩れの跡を目視することができた。円仁が通った交通路の候補地として、次に同じく段丘上に位置する西辛村へ向かった。村人によると、かつては黄河に並行して、西辛村―楊范村―吳王村を結ぶ南北の道が通っていたが、黄河に侵食されてなくなったという。

その後、小野勝年が辛駅に当たる可能性を指摘している黄龍村へ向かった。円仁は「南に行くこと四十里」で辛駅に到り、店頭で断中している（八月十三日条）。黄河東岸の台地を下ると、建設中の高速鉄道の線路がみえた。黄河を渡り、山西省と陝西省を結ぶようである。一六時四五分頃、黄龍村に到着した。村人に話をきくと、黄龍村には小樊



【写真8】 楊范村から黄河を臨む

村―黄龍村―辛営村を結ぶ南北の道が通っているが、南北の道はこれしかなく、昔からずっと使っているとのことである。また台地へ上がる道は、以前はやや北側の永寧村にあったが、今は通れなくなり、黄龍村から上がるしかないという。台地は雨が降ると崩れやすいとのことである。なお、「粉店」という名称は知らないとのことであった。

次いで一七時、黄河東岸の段丘のすぐ下に位置する辛営村に入る。辛営村の村民である魏さん（七四歳）が案内してくれることになった。魏さんによると、今の辛営村は新しい村で、一九七〇年代に現在の場所に移転してきたという。かつては今より南の、より黄河に近い場所にあったが、黄河が氾濫して流されたため、高い所に移ったとのことである。以前の村の所在地は道沿いにあり、壁が遺っている以外、他は何も遺っていないという。バスに同乗した魏さんに案内され、一七時一三分、旧辛営村に到着した。地面をみると砂が多く、黄河で運ばれてきたようにも思える。魏さんによると、この旧辛営ももとはもつと西南にあったが、民国十八年に黄河の下に沈んだという。また、今の黄河に沈んだかつての辛営村には、蒲州に繋がる南北の道があったとのことである。魏さんの祖父の世代のことだそう。我々は黄河東岸の村々をいくつか訪れたが、その先々で黄河の驚異を目の当たりにし、流域の歴史がまさに黄河との闘いであったことを痛感させられた。今回の円仁の足跡を訪ねる調査は、ここでひとまず終了となった。

一七時三〇分、魏さんを送った後、前日と同じホテルへと向かった。辛営村から黄河に並行する南北の道を通ろうとしたものの、舗装されていない土道で、バスでは通行が困難だったため、台地上の道を通ることになった。ホテルに到着したのは一八時二二分であった。その後、ホテル近くのレストランで火鍋を食した。レストランで翌日の打ち合わせをおこない、ホテルに戻って各自就寝した。

第七日目 二〇一三年十二月二十八日（土）

この日は称氏墓誌の見学と、西北大学佛教研究所との交流会が予定されていた。七時に起床し、七時二〇分頃朝食を摂る。八時四五分頃、バスに荷物を積み込み、西安へ向けて出発した。九時三五分頃、黄河を渡って陝西省へと入る。西安市内に入ると、交通量が多く、いたる所で渋滞が発生していた。一二時過ぎ、我々はひとまず西安市内で昼食を摂った。

店を後にした我々は、西安博物院へ向かった。受付で一人ずつ身分証（パスポート）を提示すると、無料で入場券を受け取ることができる。一三時過ぎに西安博物院へ入り、薦福寺および小雁塔の展示を見学する。一三時五〇分、西安市文物保护考古研究院の張全民氏と、続いて陝西師範大学の拝根興氏、西安電子科技大学の王坤氏とも合流した。張氏は先に遺物の準備へ向かい、しばらくして我々は西安古迹遺址保護研究中心へと向かった。そこで張全民氏より、二〇一〇年の西安南郊外における発掘調査の概要について説明を受け、祢氏一族の墓誌を何点かみせていただいた。

墓誌を見学した後、我々は一旦、張全民・拝根興両氏と別れて西北大学へ向かった。しかし、道中は渋滞でなかなか前進しない。バスの車窓から外を覗くと、ベッドを積んだ自転車道が道路をふさいでいた。結局、西北大学に到着したのは一五時五〇分のことであった。当初は一五時三〇分の到着を予定していたので、大幅な遅刻である。それにもかかわらず、西北大学の李利安氏は快く我々を歓迎してくださった。西北大学歴史学院の会議室に通され、李利安氏以下二五名の研究者・学生の方々と対面した。交流会は「中日佛教交往學術座談会」と銘打たれ、盛大にとりおこなわれた。それぞれ自己紹介をおこなった後、李利安氏が西北大学仏教研究所の沿革や特色を説明し、佐藤氏が巡礼行記研究会の目的およびこれまでの調査などを紹介した。我々は日唐の仏教交流に関する討論を期待していたが、西北大学側の主な関心は仏教というより神道や日本文化にあったようだ。それでも交流会は一七時四三分まで続き、活発な意見交換がおこなわれた。

この日の夜は、張全民・拝根興両氏を囲んだ会食が「百姓厨房」で催され、日中韓の研究者が親睦を深めた。二時間程の会食を終えた我々は張・拝両氏と別れ、西安の古都新世界大酒店に宿泊した。

第八日目 二〇一三年十二月二十九日（日）

今回の調査の最終日である。七時にはホテルを出発し、西安咸陽空港へ向かった。空港に到着後、河野氏・薛氏と別れてMU二二五一便にて上海へ向かった。九時一〇分に離陸し、ほぼ時間通りの運航で、一一時に虹橋空港に到着した。今回はシャトルバスで

はなく、地下鉄を利用して国際線のターミナルへと向かった。国際線ターミナルに到着した我々は、チェックインの後に王・李両氏と別れ出国の検査を受けた。なお筆者は出国手続きの際、審査官から髪を上げるよう指示を受けた。パスポートの写真と髪型が違ったからであろうか。我々が乗ったNH一二六〇便は一四時過ぎに離陸し、一七時一五分、成田空港に着陸した。その後、入国手続きを済ませて解散となった。

おわりに

二〇一三年度は、円仁が通った太原から長安までの行程のうち、概ね三分の一を踏査することができた。さまざまな成果を得ることができたが、太平県故城の良好な残存状況を確認し得た点は特筆できよう。一方、黄河流域の交通路については、河道の変遷が想定でき、復元が容易でないことを痛感させられた。調査は蒲津まで終えたが、長安までの行程を完了するには、あと一回の調査を実施する必要がある。本研究会では、『巡礼行記』に記された方位や距離を手がかりとして、「外邦図」などを駆使して現地踏査をおこない、円仁の行程を復元してきた。それに加え、調査に際してまず所管の地方政府に赴いて情報を収集し、さらに現地の古老を見付けて聞き込みをおこなうというスタイルも確立してきたといえる。ただ、近年の中国社会は急速な変化に巻き込まれており、景観の変容も著しい。村が工場地帯となれば、地名は標識などで確認できるにしても、古い景観は失われてしまい、現地で聞き込みをおこなう方法も困難となるだろう。未踏査の行程を調査する際には、そのような問題に直面する恐れがあることを痛感した数日間であった。

注

- (1) 酒寄雅志「円仁の足跡を訪ねて―山東半島―」(『栃木史学』一九二〇〇五年)、平澤加奈子「円仁の足跡を訪ねて(Ⅱ)―山東から河北へ―」(『栃木史学』二二、平成二〇〇七年)、田中史生「円仁の足跡を訪ねて(Ⅲ)―河北から山西へ―」(『栃木史学』二二、二〇〇八年)、佐藤長門「円仁の足跡

を訪ねて(Ⅳ)―江蘇省―(『栃木史学』二三、二〇〇九年)、石見清裕「円仁の足跡を訪ねて(Ⅴ)―西安―」(『栃木史学』二四、二〇一〇年)、河野保博「円仁の足跡を訪ねて(Ⅵ)―山西省・五臺山・忻州・太原―」(『栃木史学』二六、二〇一二年)、笹生衛「円仁の足跡を訪ねて(Ⅶ)―山西省―」(『栃木史学』二七、二〇一三年)、柿島綾子「円仁の足跡を訪ねて(Ⅷ)―洛陽・登封(嵩山)・鄭州―」(『栃木史学』二八、二〇一四年)。

- (2) 以下、『入唐求法巡礼行記』は『巡礼行記』と略す。また、円仁の行程について特に断らず月日のみを記す場合は、『巡礼行記』卷三、開成五年の当該月日条に拠ることを意味する。

- (3) 前回調査の報告は、笹生衛「円仁の足跡を訪ねて(Ⅶ)―山西省―」(前掲注(1) 報告)を参照されたい。

- (4) 嚴耕望『唐代交通圖考』第一卷(上海古籍出版社、二〇〇七年、初版は一九八五年)。

- (5) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第三卷(鈴木学術財団、一九六七年)。

- (6) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』(前掲注(5) 書)。

- (7) 蒲津渡遺址の発掘調査成果は、山西省考古研究所編著『黄河蒲津渡遺址』(科学出版社、二〇一三年)に報告されている。